

戦争の悪夢

●世田谷区上北沢四丁目

高山 彦三郎

(大正一四年生まれ)

昭和一九年九月、甲種合格の私は、早期現役出征をした。一九歳であった。千葉の市川野戦重砲部隊に入隊、主に諸元を観測した。

昭和二〇年三月一〇日、夜中に出勤呼集があり、東京本所、深川方面に出発、第三装（古びた服）を着て空襲で焼野原になった中に、性別も判明しない位焼ただれた黒焦げの死体が、ごろごろしていた。地獄絵そのもので、戦争の残酷さを思い知らされた。軍手をはめ防空壕から死体を引き上げる時、衣服、皮膚などが、ずるつと取れてしまう。新しい軍手を支給されたが、すぐにぐしょぐしょに濡れてしまった。死体をいっばい積んだトラックは、錦糸町公園（精工舎本社工場）に運んだ。大きな穴を掘り、そこへ死体を入れ、ガソリンをかけて焼いた。近くには馬も死に、消防自動車も真黒焦げになっていた。昼になり軍手を取って手を洗いたくても、水道もなく、そのまま汚れた手でおにぎりを食べた。その後深川の陸軍糧まつ省の倉庫に行ったら、焦げた砂糖袋があり、コークスミたいに固まっていた。くすぶっていたが、下の方が少し

狐色だったので、嘗めてみたらとても甘かった。ちょうど紅茶のような味だった。毎日死体の処理作業に行ったが、二日位使ったトラックを部隊に引き上げ、荷台を洗った。炊事場の灰や砂などまき、縄を丸め洗ったが、人間の脂が木製の荷台の床に浸み込んでなかなか落ちなかった。三月一〇日の空襲は、アメリカ軍が、東京周辺を円形に焼夷弾をまいたので、どこへ行っても逃げられずに大勢の人が死んでしまった。松戸街道を、焼け残った家財を積んだりヤカーや、大八車が、ぞろぞろと歩いていった。もんべをはいたおばさんなど防空頭巾に焼焦げた穴があき、火や煙のために目をやられ、ただれていた。

五月二五日、岡谷にある光学兵器工場に行った。私の生家は日本橋の小網町で、紙問屋をしていたが、その当時のお得意様で、南画の画家Kさんという人で、娘さんも一緒だった。家を焼け出され、知人を頼って行くところだった。Kさんから夕べ永福町が焼けたという話を聞く。「家は焼けたが、ご両親は無事で元気ですよ」と言われ、ほっとする。

途中で二人は下車した。車中で昼食になり、雑囊から飯盒を出し、飯盒の五分の一位が、コウリヤン飯と、中盒にねぎ味噌がひとつまみあり、これがおかずだった。中島工場の女子工員が、地下工場に移動するため同乗していたが、「兵隊さんそんなものを食べているのですか？」と驚き、気の毒がつて白米のおにぎり、あられ、乾燥芋などをくれた。おいしかった。岡谷に着くと、そこには勤労働員の人たちが泊っていた。そこへ市役所の人に案内された。その日の夕食は井いっばいの白米のご飯、味噌汁、野沢菜の漬物、塩鯿の焼物で、辛かったがおいしかった。

翌二六日、岡谷の蚕糸工場跡が、日本光学の工場になっていて、製品を運んでいるのが小学校五、六年生の男の子だった。目的の砲隊鏡を受け取って、背中に背負い中央線で帰って来たが、一〇キロ位あり大変重かった。

客席がいつばいで座れないまま、吉祥寺―阿佐ヶ谷―高円寺―新宿へと車窓から見える景色は、見渡す限り焼野原であった。新宿から松戸に帰った。隊長から、永福町の我が家（二泊三日）の外泊が許可され、松戸から常磐線で上野へ、地下鉄で渋谷に出る予定、ところが銀座四丁目、今の三愛、ライオンビヤホールあたり、新橋寄の所に一トン爆弾が落ちたため、地下鉄銀座線は止まっていた。京橋から銀座四丁目まで歩いたが、夜なので提灯を持って歩いている人もいた。水天宮発渋谷行の市電に乗るつもりでいたが、宮益坂の上で止まってしまい、青山辺りを歩いていたら、あちこちに死体

がごろごろしていた。銀座で焼け残ったビルは、教文館、松屋、富士アイス、和光、三越、鳩居堂などで、道路脇の防空壕の上に土を盛り、カボチャなどを作っていた。

やっと渋谷から井の頭線で永福町に着く。窓ガラスもほとんどない電車に乗った。永福町の駅前にあった我が家の焼跡に行つたが、父母もおらず、近くの人に父母の居所を聞いた。水道道路の和泉町寄に東京市の水道局の管理所があり、空襲の時そこにある直径二メートル位の鉄管に避難したらしい。

三帖間位の応急小屋を建て、父母、妹が無事だったので安心する。土産に松戸の農家で新しい靴下に米を詰め、(約五合)もう片方にさつま芋、漬物をもらい、五円札を出したが、おぼさんは受け取らなかった。かえり時間がなくなり、木炭タクシーで新宿まで送ってもらったが、運転手さんは代金をとらなかった。柏の飛行場にアメリカ軍の戦闘機隊がみごとにダイビングをして日本の飛行機を撃ち落したのを見て、日本は物量で負けると思った。大砲一つに二〇発の弾しかなかったから。

八月一五日、終戦の詔勅を聞き、内心嬉しかったが、そんな顔も出来ず、九月五日一年目にやっと帰れた。もうこんな事は二度とあつてはならない。

緑は生きている

●堀ノ内三丁目

立川 清吉

(大正四年生まれ)

東部軍司令部発令敵機大編隊は伊豆半島より東北に進行中なり、とともに空襲警報発令のけたたましいサイレンが鳴りひびく、昭和二〇年五月二五日午後九時ごろだったろうか。

去る二三日夜、五日市街道入口附近に焼夷弾が落とされ、着のみのまま家の前を布団や座布団をかぶって逃げた人たちが立正校下に避難するのを見ている。今度は俺の番かと避難の準備をする。家は全部茅葺屋根ばかり、火がついたらどうしようもない。近くの立正高女校には、高射機関銃一九〇三部隊本部があり、松ノ木中学校には高射砲四門の陣地がある。それにくわえて立川の昭和飛行機の製図部門が立正校に来ており、北側の堀之内小学校には深川病院の一部が来ておりこの状況では標的となりもうだめだと言わざるをえない。とにかく壕舎の入口に留め土をかける。母を初め妹弟たちは避難仕度。農業用大リヤカーに私共の布団、米びつ等をおせた。その時、高円寺にとついで姉妹が焼夷弾で家が焼かれたと飛んで来た。ここもあぶないと母は風呂敷にご先祖の位はいを入れて逃げる仕度。

そのうちに空からは照明弾が落ちてきて、あたり真昼間だ。女連中をいち早く逃がして、私はまず第一に当時ラジオを出せと言われていたのでラジオを出す。次に家内のタンスをいさお出し、暮と正月用に出した芋びつの横穴に入れてトタンでかぶし、次に三匹の子猫を持出し北側の垣根の元に置いてやっだが熱風で死んでしまった。

次に玄関寄りの土間のとり小屋から、とりをなんとか助けようとしたが、すでに煙が家中こもっていたためだ。その間に、いく発の油脂焼夷弾が落ちたのか解らない。私は昔の刺子をはおり、庭先に、井戸のポンプが燃えているので、水を出してかけ消火した。洗場にはかねて予期していた農具類を入れておいた。同夜の南突風の物凄さは火の玉がころがるように飛びまわる程であったが、トタンをフタにして重石用い石を放りこんだりして農具を助けた。家中がぐれんの炎につつまれる。

私がこんなことをしてる間、リヤカーを引いて家を出た親子連中だが、北方に向かって、Yさんの角まで行ったとき、

私がついてこない、家内が気づきました家の方に向かって見
 に来た。弟（中学生）も姉さんの後をおつてきたのだがすで
 に家は全焼中、前の家も全焼、元より私の姿なぞ見えるはず
 もなし、あきらめて引返す途中堀之内小学校の東側道路上の
 二人の間に焼夷弾が落下炸裂した。弟は鉄カブトの裏側
 （頭）、家内は防空頭巾の顔に、生ゴムとガソリンのようなも
 のがべったりとついた。でも当時は防火用水が道端に用意さ
 れており、火事にそなえてあったので、とっさに水につっこ
 んだので消すことができた。弟はこれも同級生の友達に家で
 消して頂いた。家内は松ノ木の方に下着類まで心配して頂き、
 兩名とも二六日の午後帰ってきてこの話を聞かされた。

その間私はシャベルで土をかけて消火作業をしていた。茅
 葺屋根の真竹のはねる音、B 29の轟音、風の音等私の耳には
 なにも聞こえず、唯夢中で作業をしていた。

立正校から堀之内小学校等風下に延焼して行くようだっ
 た。この時に落とされた焼夷弾は、一〇〇〇発近く堀之内小
 学校は、飯場の土台くいのようで敵ながら見事と思う程だ。
 家の近所で六名もの即死者が出た。私もよくこの弾の中でけ
 がもせずいたものだ、つくづく思う。とにかく熱いのとけ
 むいのとに精根もつき、門内のあじさいの根元に倒れていた
 のを、親戚の者に見つけられ助けられた。

二六日早速、姉さんの家が薦職であったので、焼トタンで
 小屋を作ってもらい、母妹弟たちは高円寺の姉の家にやつか
 いになり、私たち夫婦は屋敷内の壕舎の番をし、もうもえる

物なにもなし、矢でも鉄砲でももってこい、という気持ちに
 なっていた。二六日夕方、西の空は何事もなかったように美
 しかった。

幸い神主さんに壕舎の祈とうしてもらったせい、弾もつ
 きささらず敷地内全部なにもかも燃え、孟宗の竹やぶでさえ
 燃えつきたが、唯一つ燃えなかったのが目通り三メートル余
 りの女木の銀杏の木、それからこの木の実生で父がまいて苗
 木に育てた五〇本近くの苗木が、家と竹山の間にあったのが
 残りました。

いつくるか解らぬ、兵役義務のある身だ、住いなくては
 と、直ちに六坪の地下壕舎をつくりました。深さ一メートル
 三〇の穴を、夫婦で二日間掘り、国分寺の大工に妹がとつ
 いでおり、その親爺さんが来てくれ、そかいの時の材料を
 使い、空襲をよけながら作業して、親子一同休める家が出来
 た。下の畑で刈取った麦も幾俵か供出したり、八月一五日の
 終戦詔書も持出したラジオで拝ちよう致し、ご近所の方たち
 と号泣もしましたが忘れません。

農家でもあり、食糧事情に呼应して励みました。すべてを
 灰にしてしまったので、叔父がさつま芋苗を届けてくれるの
 ですが、容器とてなく母屋の灰に苗床のたい肥をまぜて本肥
 にして、苗を植えたものでした。

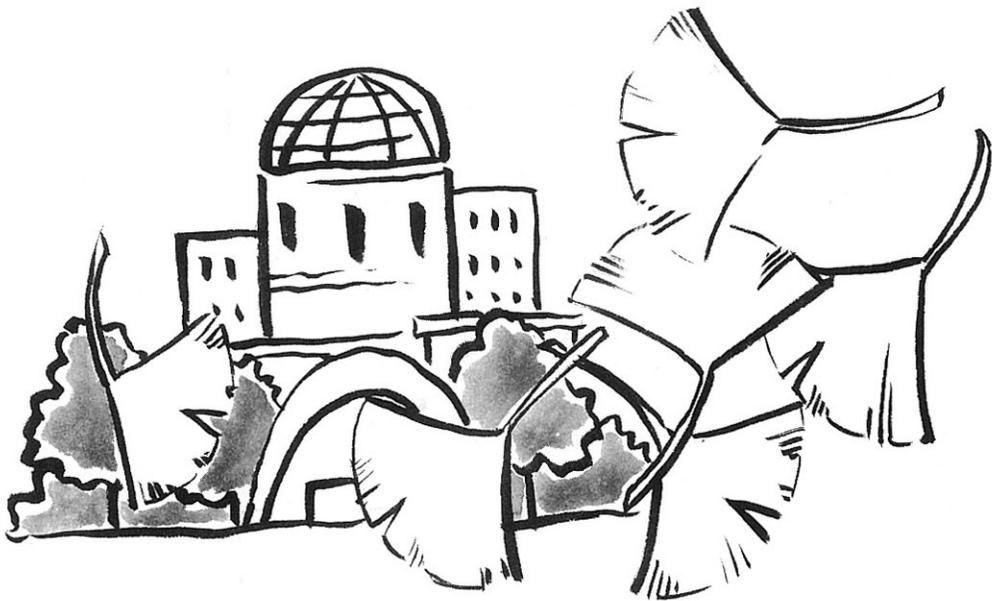
堀之内小学校の子供たちが信州の疎開から帰り、何もな
 い校舎跡にたたずみ、泣きながら立ちすくんでいる後姿は今で
 も私の脳裏からさめません。この私どもに残されたものは、

目通り三メートル余りの女木大銀杏。平素は高台でもあり、中野方面からも見え有名なものでした。

昭和二十二年春先、まだ新芽の出ない時、埼玉方面の植木屋さんが訪ねてまいり、ぜひわけてくれと言われ、聞けば広島の原爆地に公園を作るため、被爆地では普通の植木ではだめだから、ぜひ強い銀杏の木が欲しいと言われ、家でも必要がないので喜んでお役に立てばと、四五本だったが一本一円三〇銭で譲りました。貨車で今の平和公園に運ばれ植られております。

原爆で亡くなられた多くの被爆者が、水を水とさげんでお亡くなりになられた御霊に少しでも静かに安かれと、うちの銀杏の木が今も大きく育っております。

あの公園の銀杏の木全部は私の家からのものです。ドームの前の木が一番大きく育っており、我が子のように逢いたい気持ちでいました。一昨年はこの手で二五本の木にさわってまいりましたが樹齢約九〇有年、家にも同じ兄弟木があります。東京から広島に、原爆記念日には、テレビに木が映ることもあり、まことに嬉しい思いです。どうぞ元気で大きく平和に育って下さい。また逢いに行くから、生きてる緑に…。



私の戦争体験

●和泉一丁目

富田 亮一

(大正一〇年生まれ)

昭和一八年一〇月、降りつづく雨のなか当時の代々木練兵場で、学徒出陣の式があり、その年の一二月、杉並区役所二階の講堂で徴兵検査を受けた私は、昭和一九年一〇月、仙台陸軍予備士官学校へ入校を命ぜられ、みじかいながらも、戦争末期の軍隊生活に入りました。

当時は、食料はもとより物資が不足であったため、私どもの帯剣のさやは竹製ですぐひびが入り、つかい物になりませんでした。

近くの宮城野原演習場で、毎日、毎日背に破甲地雷を背おつて、戦車に肉迫し、その地雷を投げる訓練をつづけました。その戦車は、同期生のおすりヤカーでした。

また、近くを流れる広瀬川の川岸に防空壕を掘り、そのなかに四、五〇人入れる広さにまで掘りました。

そんな殺伐とした気分の毎日なのに、朝はやく、近くの病院へ勤務に行く白衣の看護婦さんの一隊が、「露営の歌」を合唱してゆきましたが、そのものがなしいメロディーは、今も耳に残っています。

昭和二〇年五月二五日の空襲で、私の自宅は、今自宅のある和泉一丁目で焼けおち、戦災者となりました。

そのころ、私は仙台陸軍病院に入院していましたが、病院での食糧不足はすごく、肺結核で死亡した人の病室の廊下に出されている、今死亡した人が食べなかつた食事を、みんなあらそつて食べたほどでした。

私が仙台の陸軍病院から東京へ転送させられた翌々日、仙台の空襲があり、私の在隊していた予備士官学校もすっかり焼けおちました。今ここは東北大学の教養学部のキャンパスになっており、若人で溢れており昔の面影は全くありません。青葉城の下ですので、建物はなくても地形は変わらず、当時歩調をとつて、毎日ゆききした坂道を通ると、当時のことがなつかしく回想されます。

昭和二〇年八月一五日の終戦の日は、非常に好天気の日でした。この日は戸山ヶ原の、地下壕の中にあつた陸軍兵器行政本部へ出むくべく、早朝家を出発して新宿方面へ、甲州街道を歩いていました。

時々、リュックを背おった国防服の人やモンペ姿の人が、白い敷布をもっています。これは、広島原爆投下にとまなう予防措置として白衣をもつよう、ラジオで伝えられたためだと、あとで判かりました。

やっと、新宿のあたりにきたとき、人々が、何だか雑音の多いラジオの放送を耳をすましてきいているのに気づき、私も立ちどまって、人々のうしろからきいていると、人々がどよめき『戦争は終わつたらしい』とのことが判かりました。

私どものような庶民には、戦争が終わるといふようなことは想像もしていなかったため、その驚きは大きく、当初は何が何だか判からず、唯焼け跡に立ちすくんでいたものでした。

戦争が終わつたことを実感したのは、私の家のすぐそばの、今の新泉小学校の焼け跡にそれまで駐屯していた軍馬の輸送部隊が、あわてて撤退して行くのを目撃したときでした。

両親と私、弟の四人は、焼け跡にバラックを建てるべく、懸命の努力をしたのは、それからです。

木材は、強制疎開でこわされた家の木材を集め、焼けトタン、焼け釘、針金を集めて、二室のバラックを建てたのは昭和二一年の正月でした。

駅前の鬧市で、お皿一枚に五尾のついでいるイワシが一〇円でしたが、私の月給が九〇円のときでしたので、これから先、どうなることかと、この時ほど将来に対する不安を、ひしひしと感じたことはありませんでした。

昭和二一年の春から夏、秋にかけては、焼け跡の無人の野

に、前の住人たちがそだてていたカボチャ、枝豆、トマト、サツマイモ、ジャガイモなどが次々となつて、これらを収穫してきては、貧しい食卓にそえることができ、何かと助かったことを思い出します。

また焼け跡の整理のため、瓦のくずややけ土を、道路をほつてその下にうめていき、道路を復旧していく作業が、やっとお役所の方で始められました。そのため当座は、道路面がカマボコ状にもり上がっていました。

当時、食糧の不足はもちろんでしたが、電力の不足、毎日の停電には、本当によりました。ランプの生活でした。たまたま電気がつくと、各家々で、まっていたとばかりに、パン焼き器でパンをやき、照明ともども電力をくうため、すぐトランスがとんで停電でした。今は各電柱に五〇キロのトランスがのつていますが、当時は十数本の電柱に対して五キロのトランスでしたから、すぐトランスがとんだわけでした。

一か月に一度か二度の米の配給が、バケツ二杯のザラメになつたときは、皆さん本当にガックリしたものでしたが、あの戦後の荒廃をのりこえ、本日の繁栄の日本を築いてきた我が日本国民は本当に立派なものだなと、つくづく実感している毎日です。